

# 東夷伝（1）挾婁

I はじめに

II 挾婁伝を読む

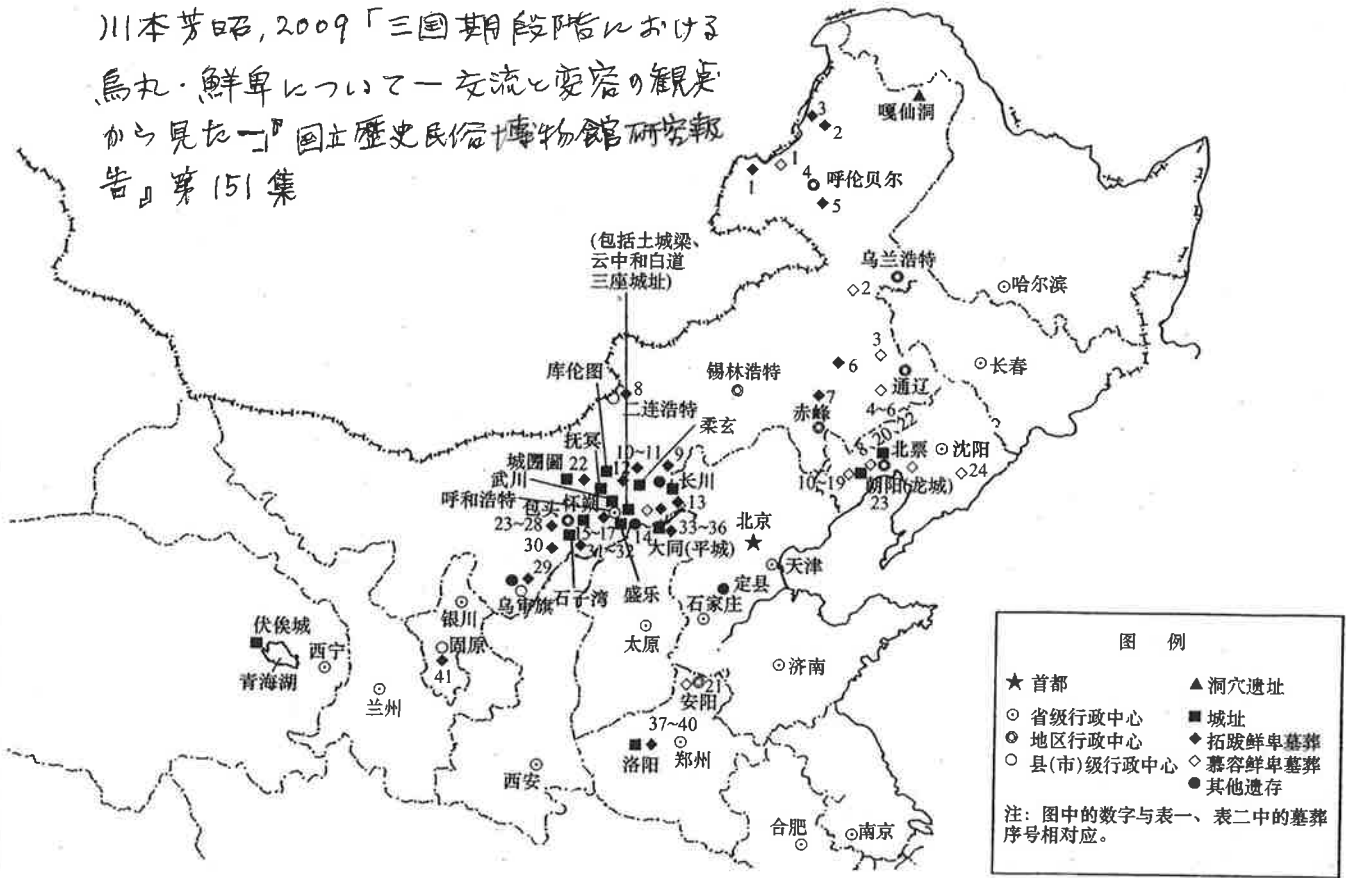
III 挾婁伝の考古学的アプローチ

IV おわりに

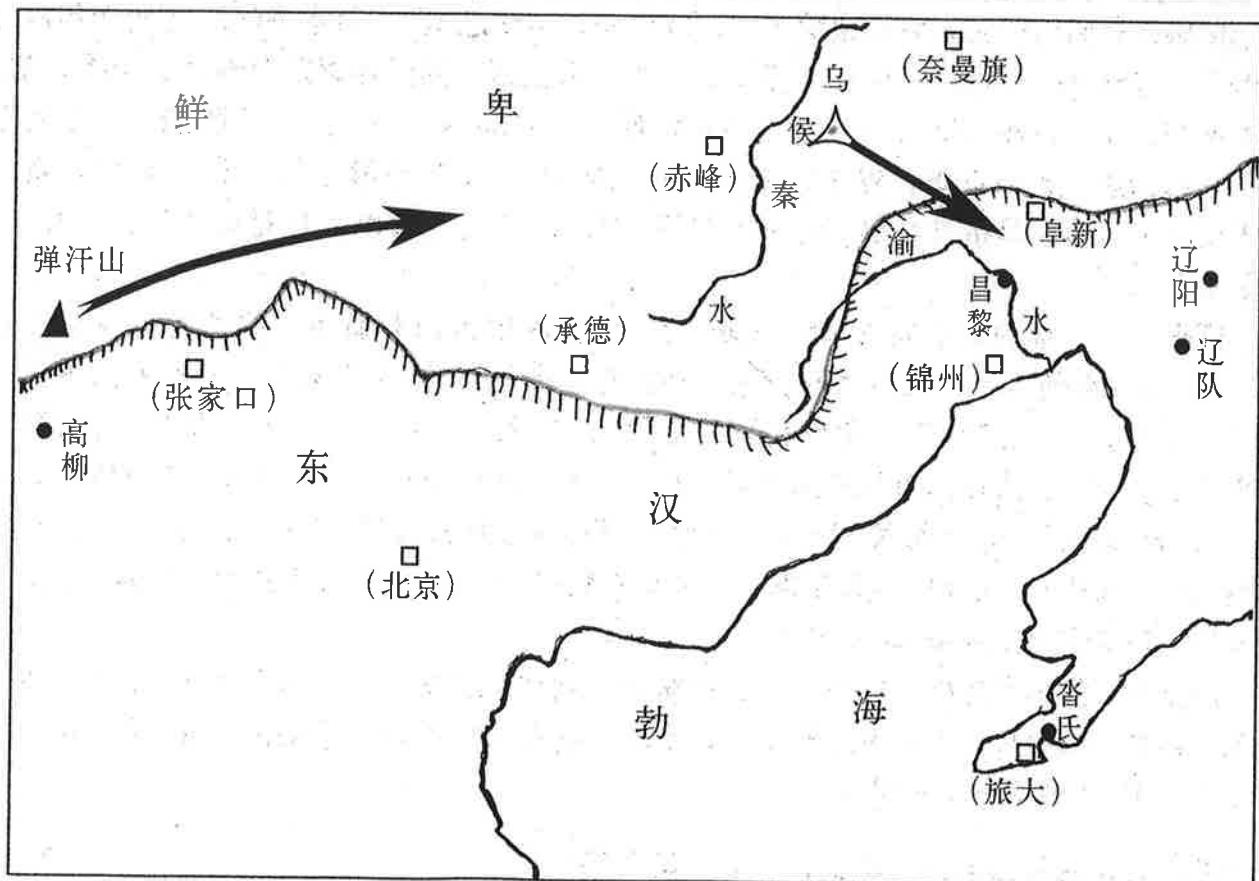
今後の課題



川本芳昭, 2009 「三国期段階における  
烏丸・鮮卑について—交流と変容の観点  
から見た—」『国立歴史民俗博物館研究報  
告』第151集



鮮卑遺跡分布図：孫危『鮮卑考古学文化研究』科学出版社, 2007, P.3



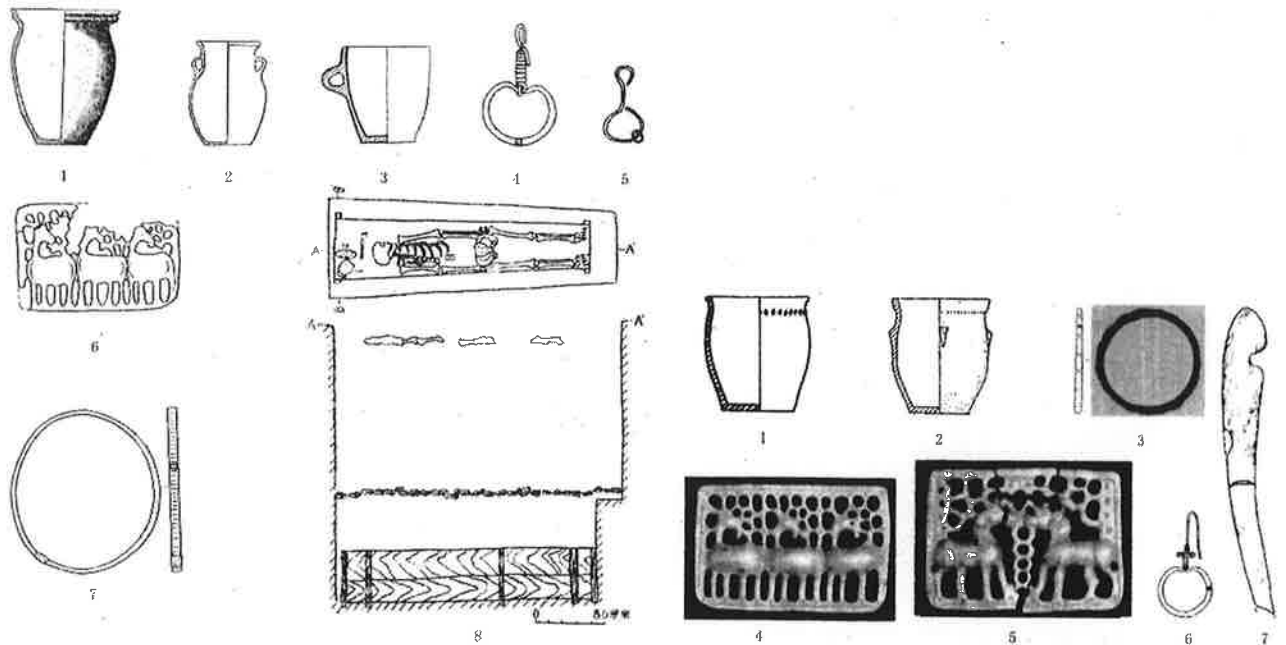
● 昌黎 东汉城市    ▲ 弹汗山 (鲜卑王庭)    → 檀石槐东击倭人国路线  
□ (阜新) 现代城市    mmm 东汉、鲜卑分界线    比例尺 (大约) 1:35km

檀石槐东击倭人国示意图

温玉成, 2007 「鲜卑檀石槐东击倭人国考」『河南博物院建院80周年论文集,  
大象出版社



中国境内东汉时期鲜卑遗存分布图

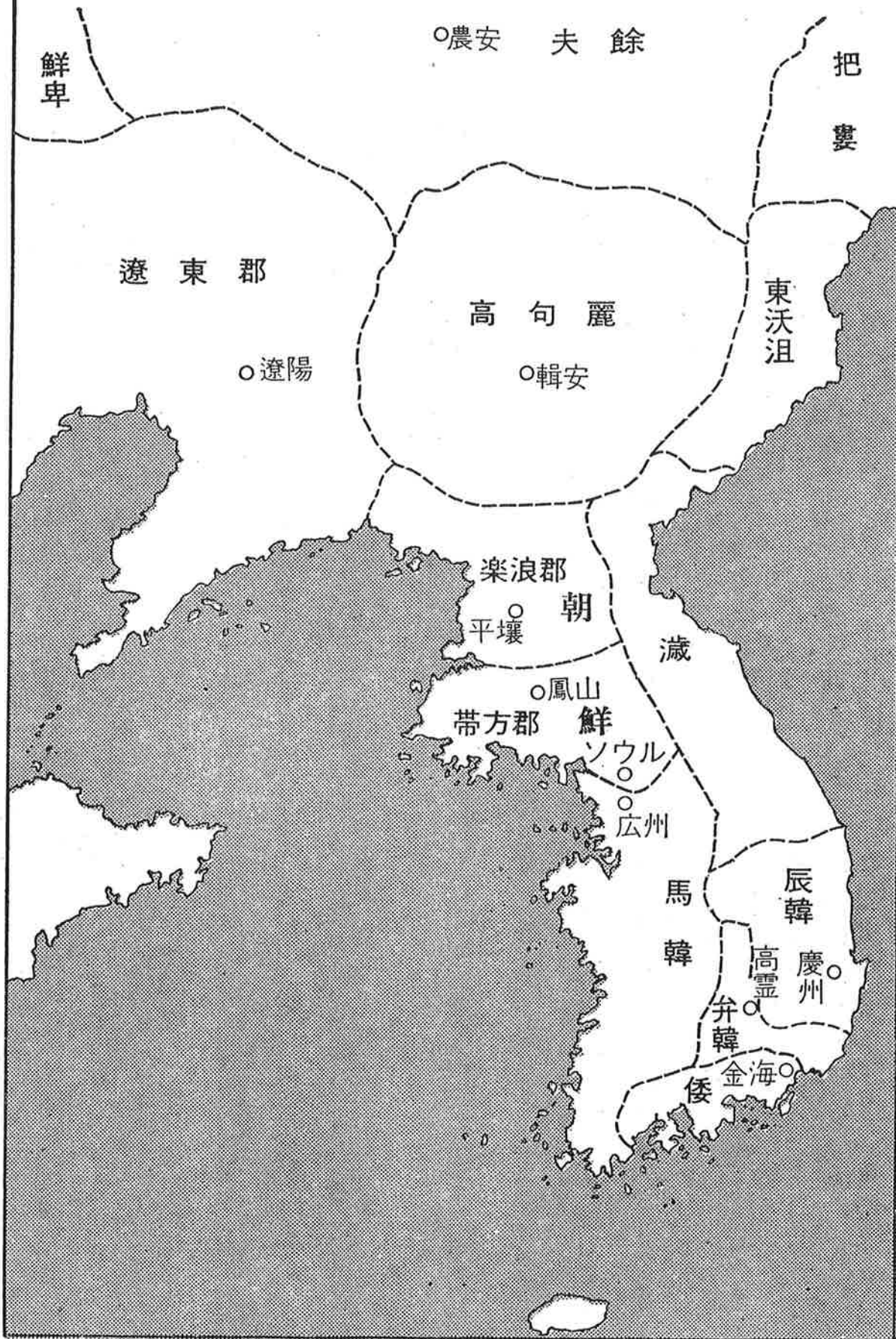


呼伦贝尔地区东汉前中期鲜卑遗存中的自身特有文化因素  
 1、2.大口陶罐 3.单耳杯 4.铜耳饰 5.金耳饰 6.三鹿纹铜牌饰  
 7.铜手镜 8.拉布达林墓地 M6 平面图  
 (1、4、6、7.扎米诺尔墓地 其余为拉布达林墓地)

长城地带中段鲜卑遗存中的鲜卑固有文化因素举例  
 1、2.大口罐 3.铜罐 4.三鹿纹金牌饰 5.对鹿纹金牌饰 6.金耳饰  
 7.骨弓刃  
 (1、3-7.三道湾 2.善家堡 3.东大井)

潘玲 (木下保明 記), 2013 「漢代における匈奴と鮮卑の考古資料の比較」 『漢魏帝國の空間構造—都城・直道・郡縣都市—』 東亜大学

『三国志』東夷伝による諸民族の地理的位置



井上秀友 他 訳注, 1974 『東アジア民族史 1 正史東夷伝』 平凡社 東洋文庫 264

人々は不潔で、中央に溷こん（便所兼猪小屋）を作り、人はその外側をとりまくようにして住む。彼らの弓は長さが四尺、弩いしゆみほどの力があり、矢に楛こ（木材の名）を用いて、長さが一尺八寸、青石で鏃やじりを作る。「肅慎しゆくしん氏の矢として名の知られる」古の肅慎いにしえ氏の国なのである。弓に巧みで、人を射るときにはみな目を射当てる。矢には毒が塗られていて、人がそれにあたればみな死ぬ。赤玉と良質の貂てんを産出する。いま挹婁の貂ちようと呼ばれているのがそれである。漢代以来、夫余に臣下として従属していたが、夫余が重い上納税を課したため、黄初年間（二二〇—二二六）に反抗し「て独立し」た。夫余はしばしば討伐を加えたが、彼らは人数は多くはないとはいえ、険しい山中に住み、隣国の者たちは彼らの弓矢を畏おそれていたため、最後まで服従させることはできなかつたのである。その国の者たちは、巧みに船に乗り侵入強奪をはたらいて、隣国をなやませている。東夷のものは飲食にはほとんどみな俎そや豆とう（たかつき）を用いるのであるが、挹婁だけはそうした習俗にのっとらず、東夷の中でもっとも無規律なものたちである。

(25) 挹婁人の地下式住居については、三上次男『古代東北アジア史研究』に詳しい。なお三上氏は、挹婁人の毒矢や人尿の使用などを取り上げて、東夷の中でも挹婁人が特異な存在であったことを指摘している。

たちは中国の支配下に入つてその命令に従うようになった。のちに高句麗こうくりがそむくと、ふたたび軍の一部を分けて討伐におもむかせた。その軍は極遠の地をきわめ、烏丸うがん・骨都こつとをこえ、沃沮よくそを通り、肅慎しゆくしんの支配地に足をふみ入れて、東方の大海に臨む地にまで到達した。「そこに住む」老人の言葉によれば、不思議な顔つきの人種が「さらに東方の」太陽が昇る所の近くにいる、とのことであつた。ひきつづいてそのあたりの国々をくまなく観察してまわり、その掟おきてや風俗を採訪して、彼らの間の大小の区別や、それぞれの国の名が詳細に記録されることになった。これらは夷狄いてきの国々ではあるが、祭祀の儀礼が伝わっている。中国に礼が失われたとき、四方の異民族の間にその礼を求めるといふことも、実際にありえよう。<sup>(13)</sup>それゆえこれらの国々を順々に記述し、それぞれの異なつた点を列挙して、これまでの史書に欠けているところを補おうとするのである。

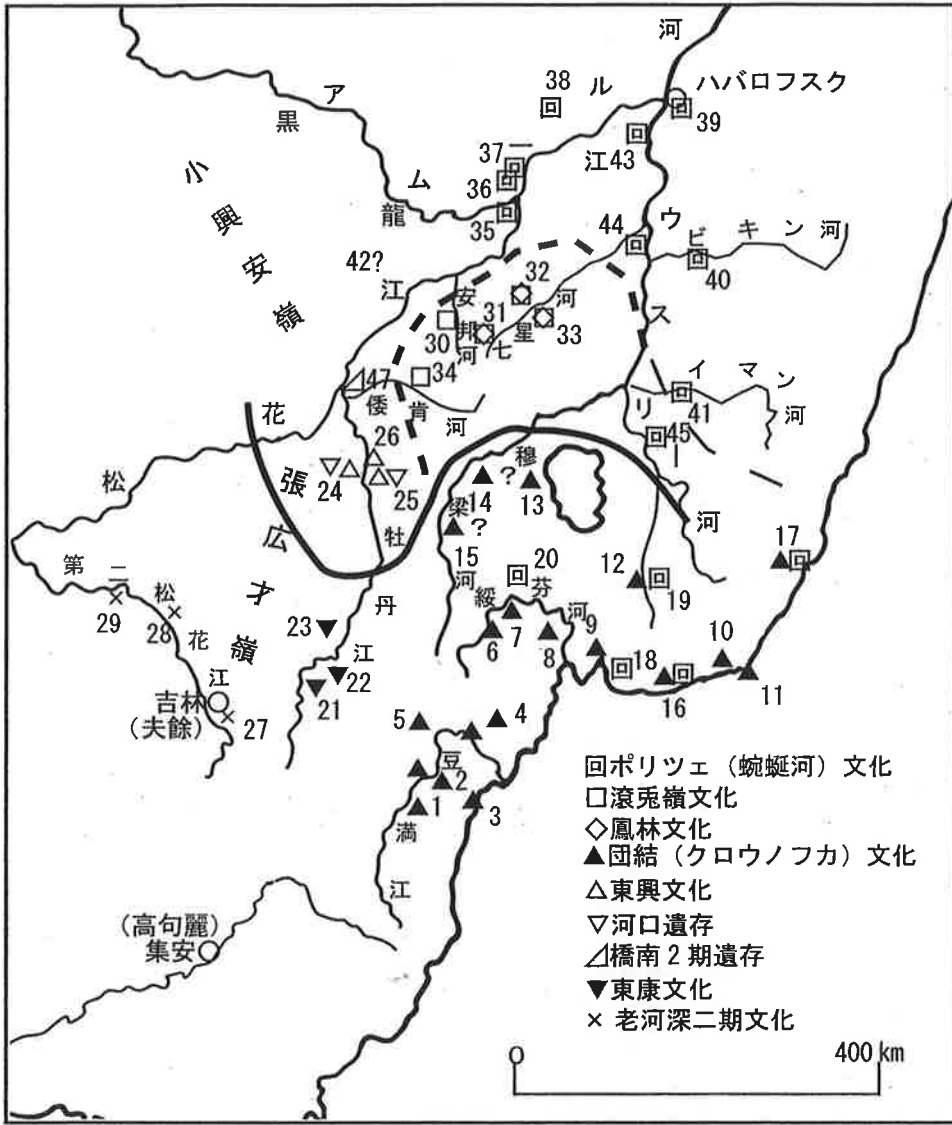
**挹婁**いろうは、夫余ふよの東北千余里の所にいる。大海に面し、南は北沃沮よくそと境を接し、北はどこまで及ぶのかわからない。その土地は険しく山地が多い。人々の形貌は夫余に似ているが、言葉は夫余や句麗くりと違つている。五穀や牛・馬・麻布などを産する。人々は多く勇敢で力がある。大君長(統一的な指導者)はなく、邑落ゆうらくごとに大人たいじんがいる。山林の間に居住し、いつも穴居して、その穴の深さは大きな家では九梯(はしご九段)にもなり、その梯数が多ければ多いほど立派だとされる。<sup>(25)</sup>土地の気候は寒冷で、夫余よりもきびしい。その地の人々は盛んに猪ぶたを飼ひ、その肉を食料とし、その皮を着物とする。冬には猪の膏あぶらを身体に数分の厚さに塗つて、風や寒さをふせぐ。夏には裸で、わずかばかりの布で前後を隠し、からだを蔽おほう。

『尚書』〔禹貢篇〕には、「東は海に入るまで、西は流沙に及ぶまで〔の地域に、中国の教化が広がった〕」と書かれている。「すなわち」こうした九服の制度(11)に含まれる地域については、確かな根拠をもってそれを述べる事が可能なのである。しかし九服のもっとも外がわの荒服(12)のさらになたの地域については、そこからの使者が幾度も通訳を重ねて中国にやってくることはあっても、中国人の足跡や馬車の軌(13)はそこまで及ばず、その国々の民衆の生活やさまざまな土地のありさまについて知る者はなかったのである。舜帝(14)の時代から周代にいたるまでの間に、西戎(15)（西方の異民族）が白玉の環(16)を献上したり、東夷が肅慎(17)氏の弓矢を上納したりすることはあったが、そうしたものも久しく年代を隔ててときたまやってくるのであって、その土地の遠さは、こうした事からも知ることができよう。漢の王朝が張騫(18)を使者として西方に遣わし、黄河の源流をつきとめ、多くの国々を遍歴させたことがあって、その結果、都護(19)の官が置かれてこの地域を総領するようになった。それ以後、西域(20)のことが詳しく知られ、そのため史官たちもそれを詳細に記録することができたのである。魏が国をおこしてからは、西域のすべての地域から使者が来るといふわけにはゆかなかつたが、それでもその中の大国である龜茲(21)・于寘(22)・康居(23)・烏孫(24)・疎勒(25)・月氏(26)・鄯善(27)・車師(28)といった国々からの朝貢がない年はなく、漢の王朝の場合とほぼ同様なのであった。ただ「東方の地域については」公孫淵(29)が父祖三代にわたって遼東の地を領有したため、天子はそのあたりを絶域(30)（中国と直接関係を持たぬ地域）と見なし、海のかなたのこととして放置され、その結果、東夷との接触は断たれ、中国の地へ使者のやってくることも不可能となった。景初年間（二三七―二三九）、大規模な遠征の軍を動かし、公孫淵を誅殺すると、さらにひそかに兵を船で運んで海を渡し、楽浪(31)と帯方(32)の郡を攻め取った。これ以後、東海のかなたの地域の騒ぎもしずまり、東夷の民

書稱「東漸于海，西被于流沙」。其九服之制，可得而言也。然荒域之外，重譯而至，非足跡車軌所及，未有知其國俗殊方者也。自虞暨周，西戎有白環之獻，東夷有肅慎之貢，皆曠世而至，其遐遠也如此。及漢氏遣張騫使西域，窮河源，經歷諸國，遂置都護以總領之，然後西域之事具存，故史官得詳載焉。魏興，西域雖不能盡至，其大國龜茲、于寘、康居、烏孫、疎勒、月氏、鄯善、車師之屬，無歲不奉朝貢，略如漢氏故事。而公孫淵仍父祖三世有遼東，天子爲其絕域，委以海外之事，遂隔斷東夷，不得通於諸夏。景初中，大興師旅，誅淵，又潛軍浮海，收樂浪、帶方之郡，而後海表謐然，東夷屈服。其後高句麗背叛，又遣偏師致討，窮追極遠，踰烏丸、骨都，過沃沮，踐肅慎之庭，東臨大海。長老說有異面之人，近日之所出，遂周觀諸國，采其法俗，小大區別，各有名號，可得詳紀。雖夷狄之邦，而俎豆之象存。中國失禮，求之四夷，猶信。故撰次其國，列其同異，以接前史之所未備焉。

挹婁在夫餘東北千餘里，濱大海，南與北沃沮接，未知其北所極。其土地多山險。其人形似夫餘，言語不與夫餘、句麗同。有五穀、牛、馬、麻布。人多勇力，無大君長，邑落各有大人。處山林之間，常穴居，大家深九梯，以多爲好。土氣寒，劇於夫餘。其俗好養豬，食其肉，衣其皮。冬以豬膏塗身，厚數分，以禦風寒。夏則裸袒，以尺布隱其前後，以蔽形體。其人不絜，作溷在中央，人圍其表居。其弓長四尺，力如弩，矢用楛，長尺八寸，青石爲鏃，古之肅慎氏之國也。善射，射人皆入（因）（目）。矢施毒，人中皆死。出赤玉、好貂，今所謂挹婁貂是也。自漢已來，臣屬夫餘，夫餘責其租賦重，以黃初中叛之。夫餘數伐之，其人衆雖少，所在山險，鄰國人畏其弓矢，卒不能服也。其國便乘船寇盜，鄰國患之。東夷飲食類皆用俎豆，唯挹婁不，法俗最無綱紀也。





- 1. 虎谷
- 2. 五洞
- 3. 草島
- 4. 一松亭
- 5. 新安閣
- 6. 團結
- 7. 大城子
- 8. クロウノカ
- 9. オレニーI
- 10. キエフカ
- 11. ベトロフ島
- 12. クルグラヤ
- 13. セミピヤトナヤ谷
- 14. 鶏東保安
- 15. 小四方山
- 16. プロチカ
- 17. シニエ・スカル
- 18. マラヤ・パドシチェカ
- 19. ルダノフスキー
- 20. センキナ・シャブカ
- 21. 牛場
- 22. 東康
- 23. 大牡丹江
- 24. 河口
- 25. 振口
- 26. 東興
- 27. 泡子沿
- 28. 老河深
- 29. 田家砬子
- 30. 滾兔嶺
- 31. 保安2号
- 32. 鳳林
- 33. 炮台山
- 34. 小八浪
- 35. 蜿蜒河
- 36. ポリツェトカ
- 37. コチコヴァトカ
- 38. ジョルティ・ヤル
- 39. アムールサナトリウム
- 40. ムジザ
- 41. ロシナ
- 42. 小山
- 43. 海青
- 44. 四排
- 45. グラゾフカ

図1 関連する遺跡の分布

表1 ポリツェ文化の編年と地域性

| アムール川中流域        | 沿海州南部  | アムール河口        |
|-----------------|--|---------------|
| コチコヴァトカ (+)     | ルダノフスキー  |               |
| 3期 (クケレヴォ期)     | ↑?   |               |
| 新段階             | ↑?   | ↑?            |
| アムール・サナトリウム (+) | プロチカ / グラゾフカ   | ズメイカI (+)     |
| 2期 (ポリツェ期)      |  |               |
| 古段階             |  |               |
| 1期 (ジョルティ・ヤル期)  | ジョルティ・ヤル   | スタラヤカ・コルマ (+) |
|                 | <div style="writing-mode: vertical-rl; padding: 5px;">           團結文化         </div> |               |

大貫清夫, 2009「挹婁の考古学」『国立歴史民俗博物館研究報告』第151集

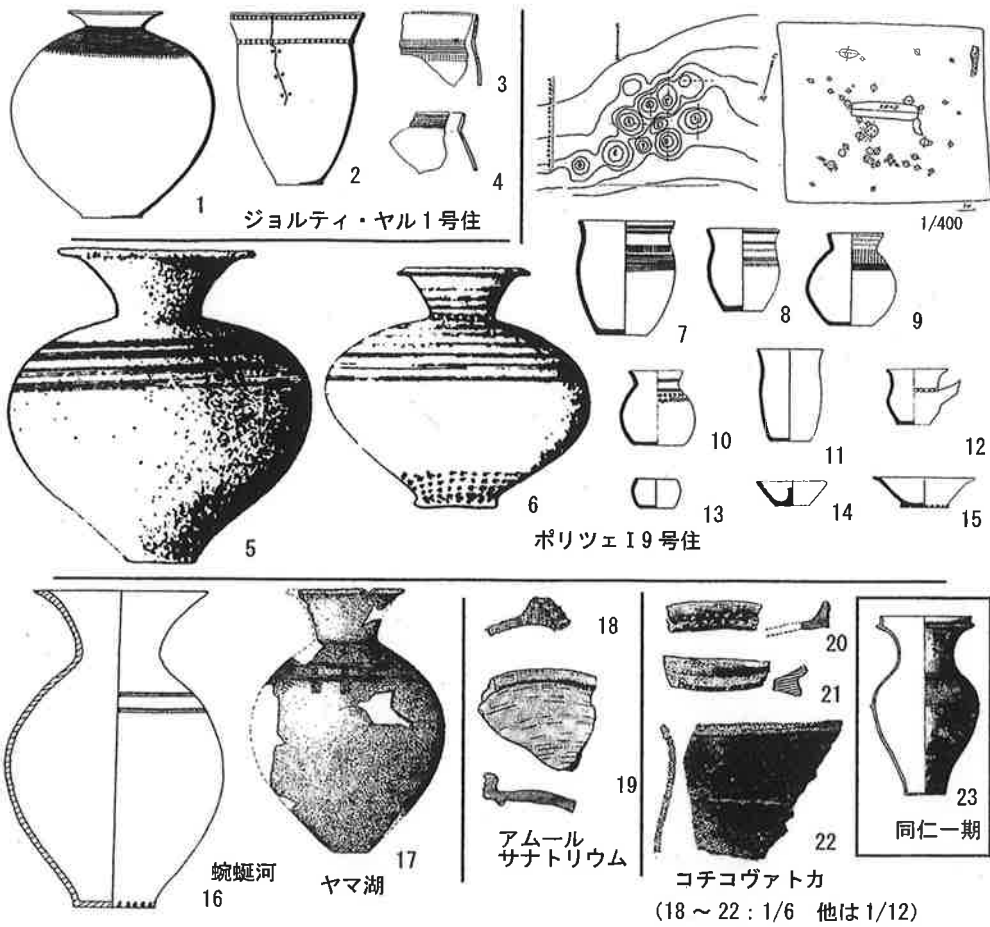


図2 アムール川中流域ポリツェ文化および関連する遺跡の遺構と遺物

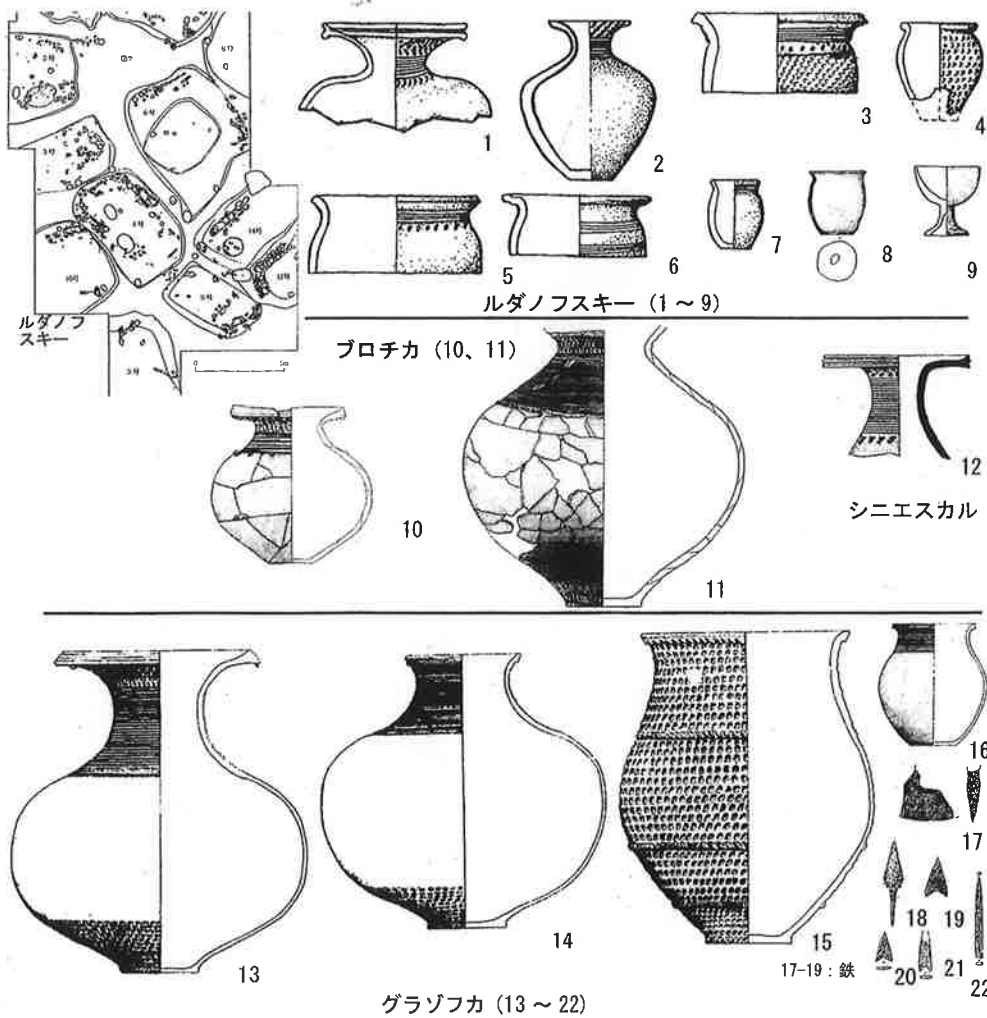


図3 沿海州ポリツェ文化(1~9は不明。17~22は1/6, 他は1/12)

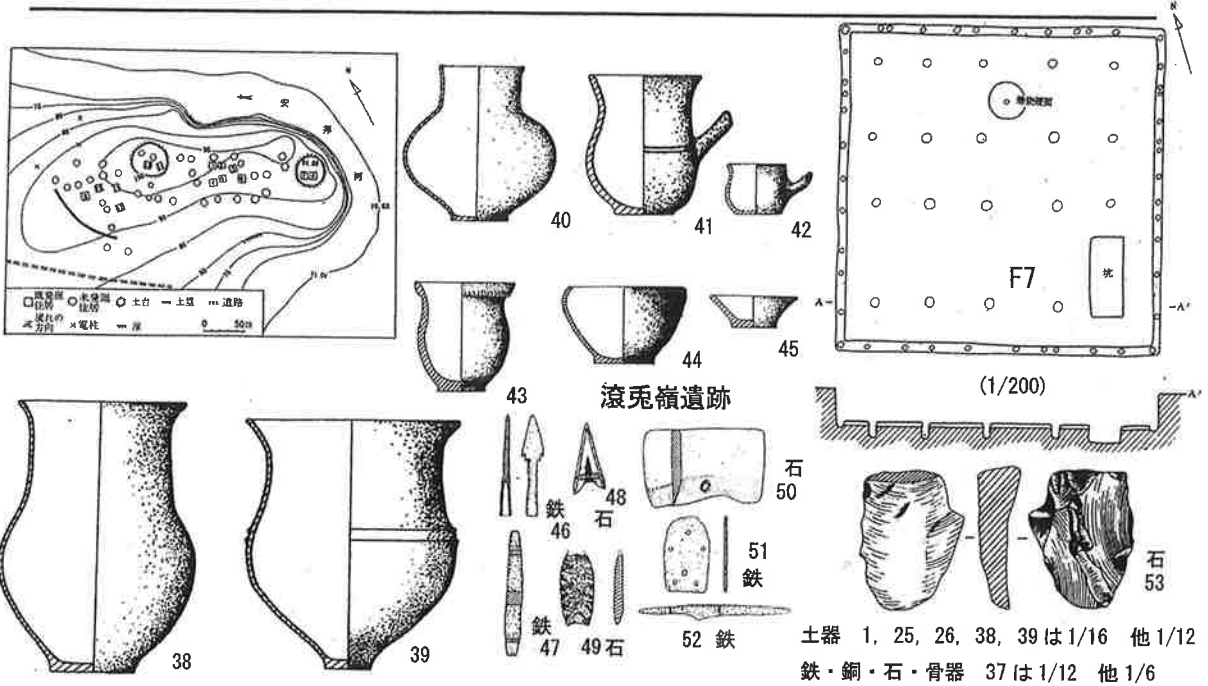
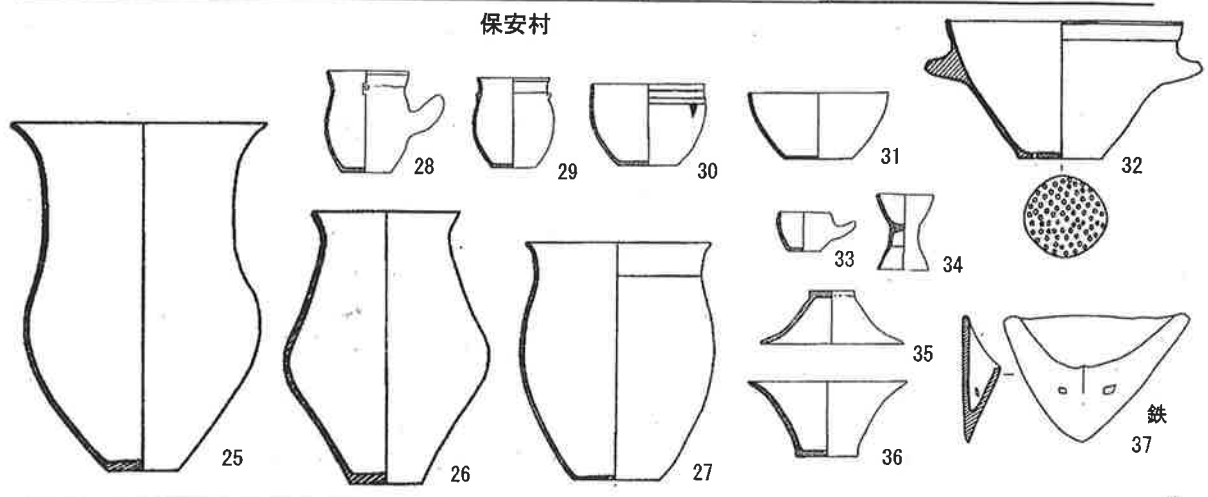
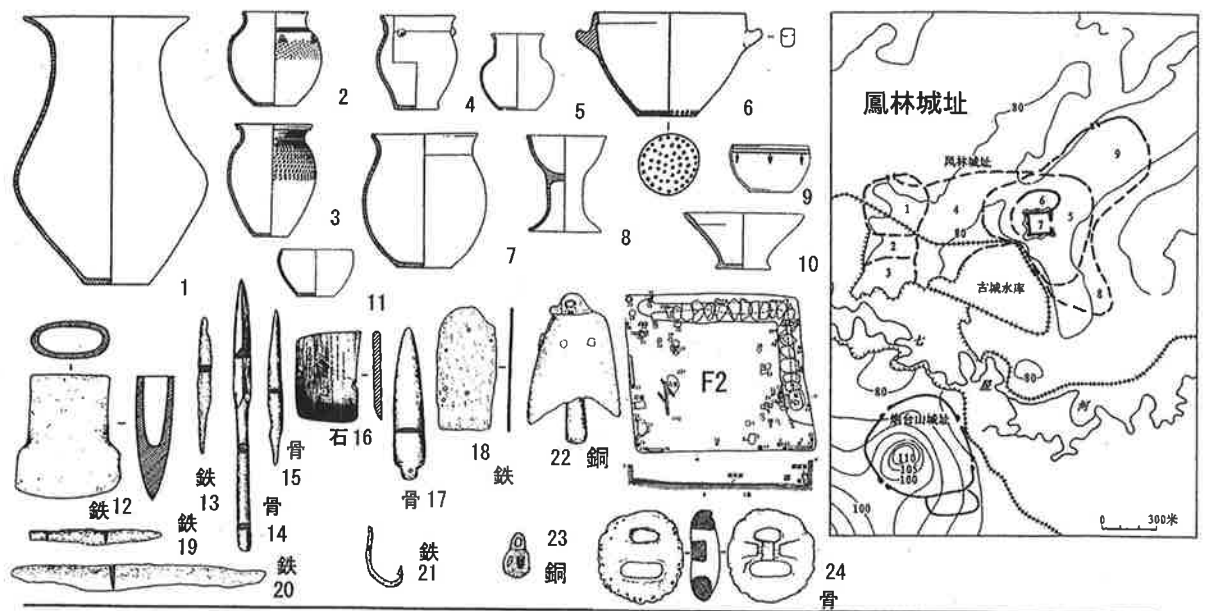
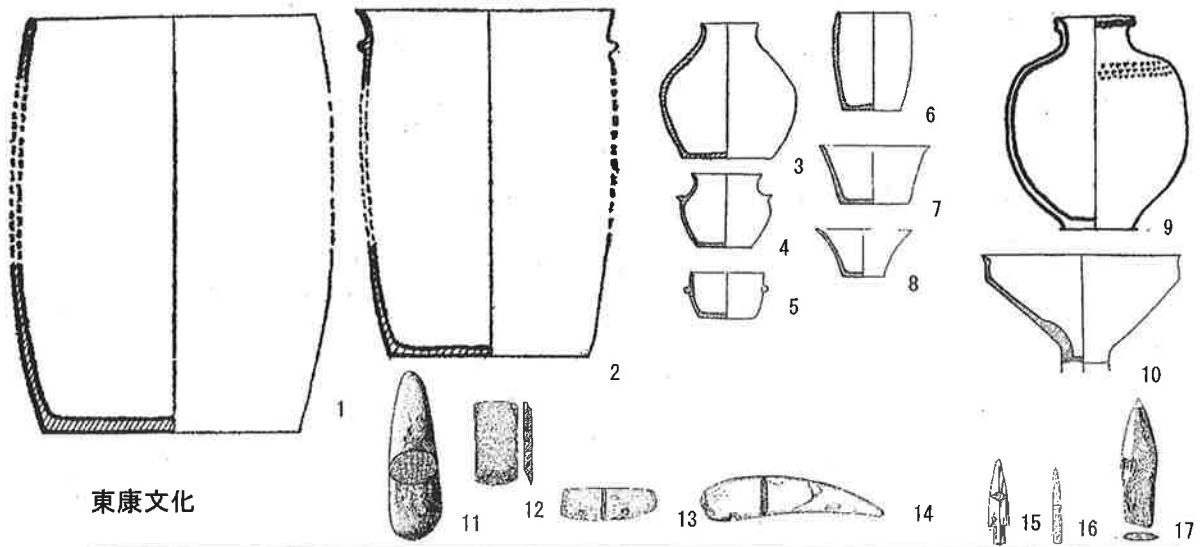
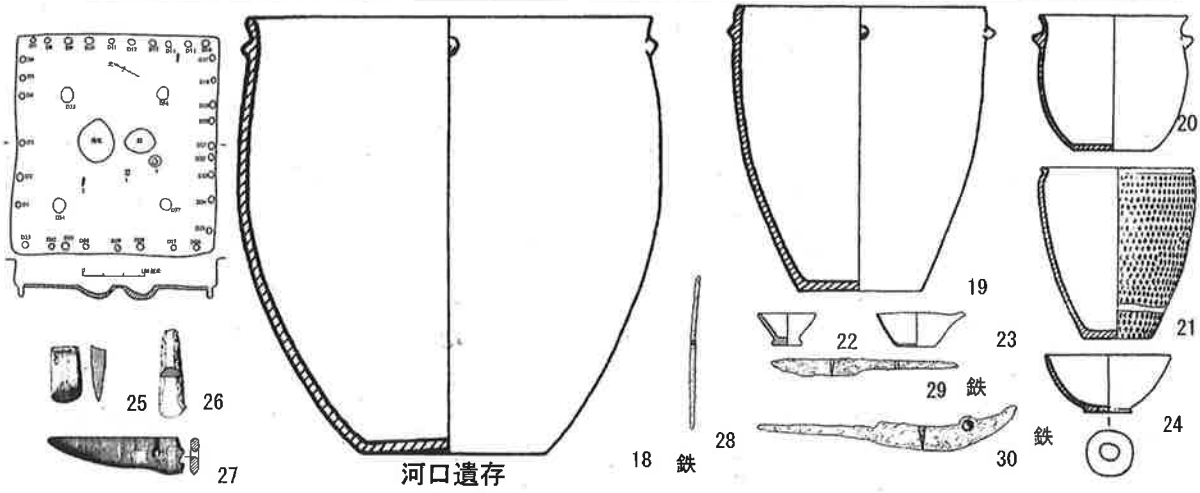


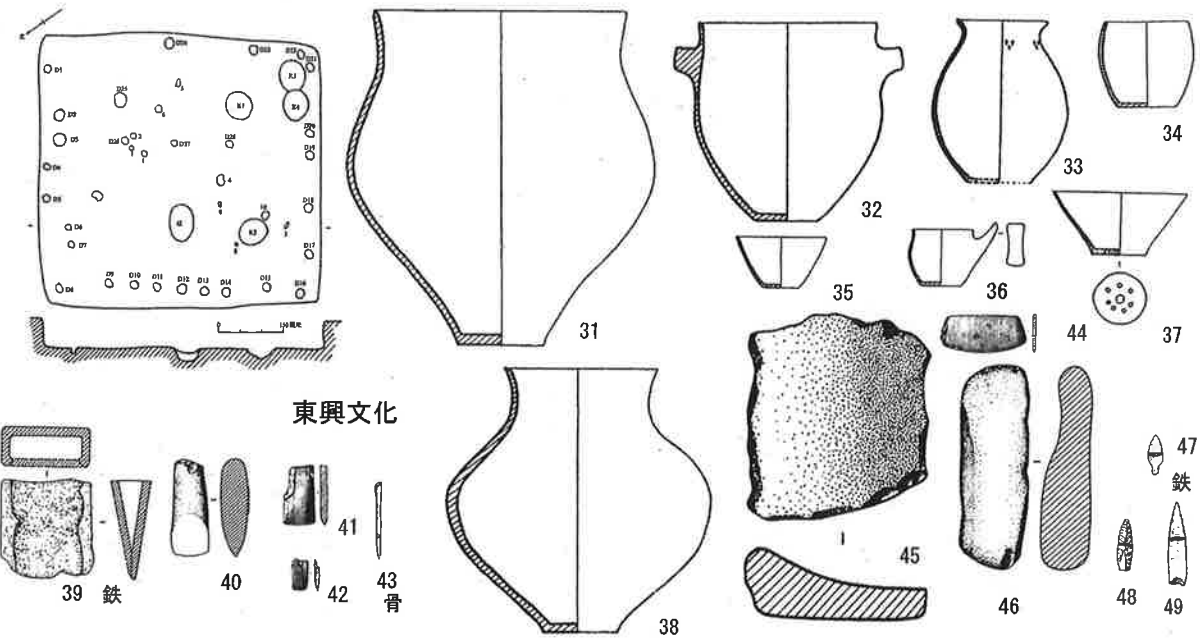
図4 滾兔嶺文化・鳳林文化の遺構と土器



東康文化



河口遺存



東興文化

1-9, 11-17は東康, 10は東昇, 21, 28, 30, 39, 48, 49は振興, 他は河口  
15-17, 28-30, 39, 47-49は1/6 他は1/12

図6 牡丹江流域の遺構と遺物

表2 牡丹江、七星河流域の編年と地域性

|   | 牡丹江中流 | 牡丹江下流 | 牡丹江河口部 | 七星河 | 沿海州南部    |
|---|-------|-------|--------|-----|----------|
| 新 | ?     | 河口    | ?      | 鳳林  | ポリツェ (沿) |
|   | ↑     |       |        |     |          |
| 古 | 東康?   | 東興    | 橋南2    | 滾兔嶺 | 団結       |

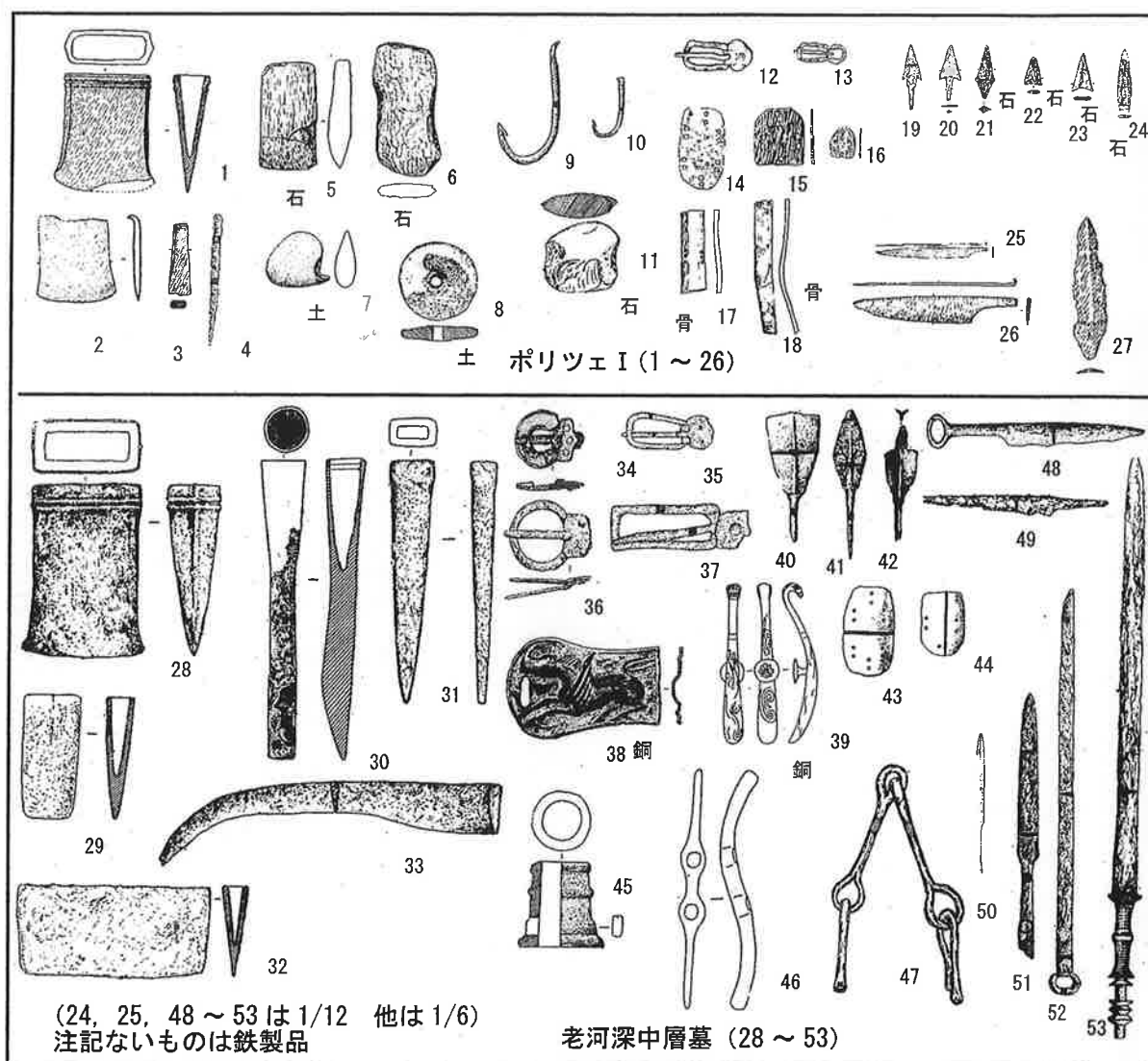


図5 ポリツェ文化および関連する遺跡出土の鉄製品他の遺物

表3 諸文化、遺存の主要組成対照表

| 文化名             | 段階 | 竪穴住居       | 高坏 | 甗        | 鏃                  | 小札       | 鉄斧         | 石斧 | 鉄刀子 | 釣り針 | 農具                   | 農作物                           | 家畜                | ト骨  | その他  |
|-----------------|----|------------|----|----------|--------------------|----------|------------|----|-----|-----|----------------------|-------------------------------|-------------------|-----|------|
| ポリツェ<br>(アムール中) | 古  | ○          | X  |          | 鉄<br>磨石<br>打石<br>骨 | 鉄骨       | 扇形2<br>条突帯 |    | ○   | 鉄   | 石<br>鉞<br>すりうす       | キビ                            | ブタ<br>ウマ<br>ヤギ    |     |      |
| ポリツェ<br>(沿海州)   | 新  | ○<br>(祖形坑) | △  | 単孔       | 鉄<br>磨石            | 鉄?<br>鉄? | ○<br>再生鑿   |    | ○   |     |                      | アワ                            | ブタ<br>(ウマ<br>ウシ?) |     |      |
| 遼兎嶺             | 古  | ○          | X  |          | 鉄<br>磨石<br>打石      | 鉄        |            |    |     |     | 石包丁<br>すりうす          | オオアサ                          | ブタ<br>ウマ          |     | 打製石器 |
| 鳳林              | 新  | ○<br>(祖形坑) | ○  | 多孔       | 鉄骨                 | 鉄        | ○          |    |     | 鉄   | 石包丁<br>すりうす<br>鉄犁    |                               | ウシ                | ウシ  |      |
| 団結              | 古  | ○<br>(祖形坑) | ○  | 虎5<br>単孔 | 磨石<br>打石           |          | 板状         | ○  |     |     | 石包丁                  | アワ<br>キビ<br>オオムギ<br>コムギ<br>マメ | ブタ<br>ウシ少<br>ウマ少  | ブタ? | 黒曜石  |
| 東興              | 古  | ○          | X  | 虎6<br>多孔 | 鉄<br>磨石<br>打石      |          | 袋状<br>再生鑿  |    |     | 鉄   | 石<br>鉄包丁<br>鉄鎌<br>鋤先 | アワ・キビ                         | ブタ?               | ブタ? |      |
| 河口              | 新  | ○          | X  | 単孔       |                    | 骨        | ○          | ○  | ○   |     | 石包丁<br>すりうす          |                               |                   |     |      |
| 東康              | 新  | ○          | ○  |          | 鉄<br>磨石<br>打石<br>骨 | 骨        |            |    |     |     | 石包丁<br>石鎌<br>すりうす    |                               | ブタ<br>ヒツジ?        |     |      |

(11) 九服は『周礼』夏官・職方氏に見える地域区分の名。第三冊四六一頁、注(19)参照。九服に含まれる地域がなんらかの意味で中国の教化を受けるとされる。なお本文につづいて「荒服」の語が見えるが、これは同様の五服の制(『尚書』禹貢篇に見える)の最も外側の地域で、九服の制では鎮服・藩服にあたると思われる。

(12) 漢の武帝の時代、張騫が西域を旅行したこと、やがて烏壘城に都護府がおかれたことは『史記』大宛伝、『漢書』西域伝などに詳しい。

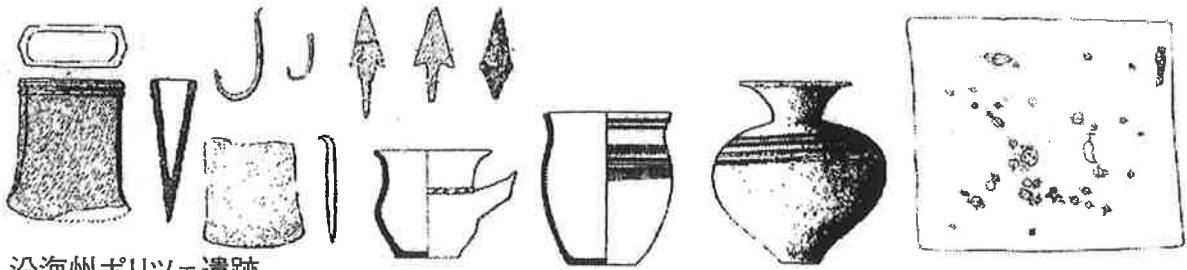
(13) この表現、『春秋左氏伝』昭公十七年の、孔子の言葉「我れこれを聞く、天子 官を失すれば、学は四夷に在りと、猶お信なり」にもとづく。

### 三國志 魏書 毋丘儉伝

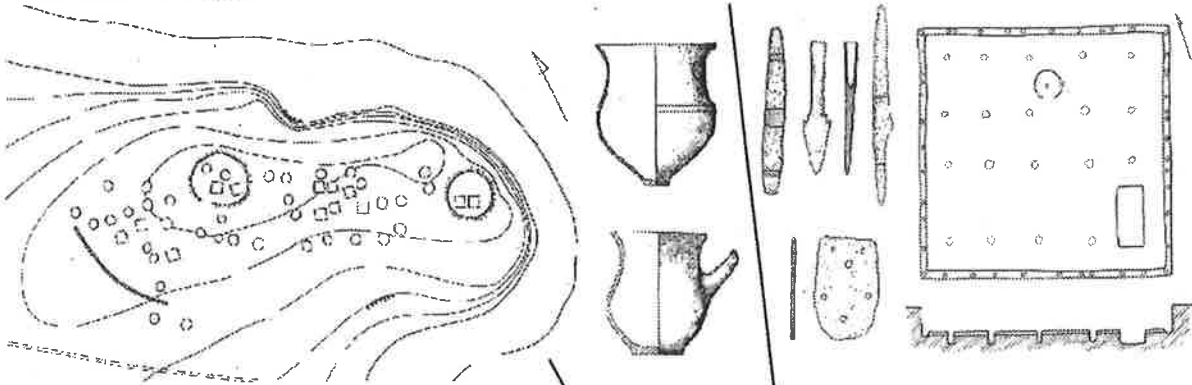
正始年間、毋丘儉は、高句驪がたびたび反逆して侵攻してくるため、諸軍の歩兵・騎兵一万人を指揮して玄菟を進發し、諸街道をとおってこれを討伐した。句驪王の位宮が二万の歩兵・騎兵をひきつれ、沸流水(今の鴨綠江)のほとりに進出してきたので、梁口で大会戦となった。位宮は負けいくさを重ねて逃走した。かくて毋丘儉は馬をくくってかつぎ車をつるして丸都山に登り、句驪の都を破壊し、四けたにのぼる首級と捕虜を得た。句驪の沛者の得來という男は、たびたび位宮を諫めたが、位宮はその言葉に従わなかった。得來は歎息して「たちまちのうちにこの地にもよぎが生えるだろう」といい、かくて食事をとらずに死に、國民あげて彼をすぐれた人物としてたたえた。毋丘儉は、彼の墓を破壊するな、墓の木を切るな、彼の妻子をつかまえてもすべて釈放しろ、と諸軍に命令を下した。位宮はただひとり妻子をつれて逃げ隠れた。毋丘儉は軍をひきあげ掃蕩した。六年(二四五)、ふたたび征討を行ない、位宮はついに買溝へと逃げた。毋丘儉は玄菟の太守王頌にこれを追撃させた。彼は沃沮(國名)を過ぎて千余里、肅慎氏(挾婁國の古名)の南界まで到達し、石に功績を刻みつけ、丸都の山に文字を彫り、不耐の城に銘文を記した。誅殺したり降伏させたりした数は八千余人、軍功をとりあげられて賞を受け、侯となった者は百余人あった。山にトンネルを掘り灌漑を行なったので、住民はその利益の恩恵を受けた。

(一) 臣、裴松之の言。「東夷伝」を調べると、沛者とは句驪國の官名である。

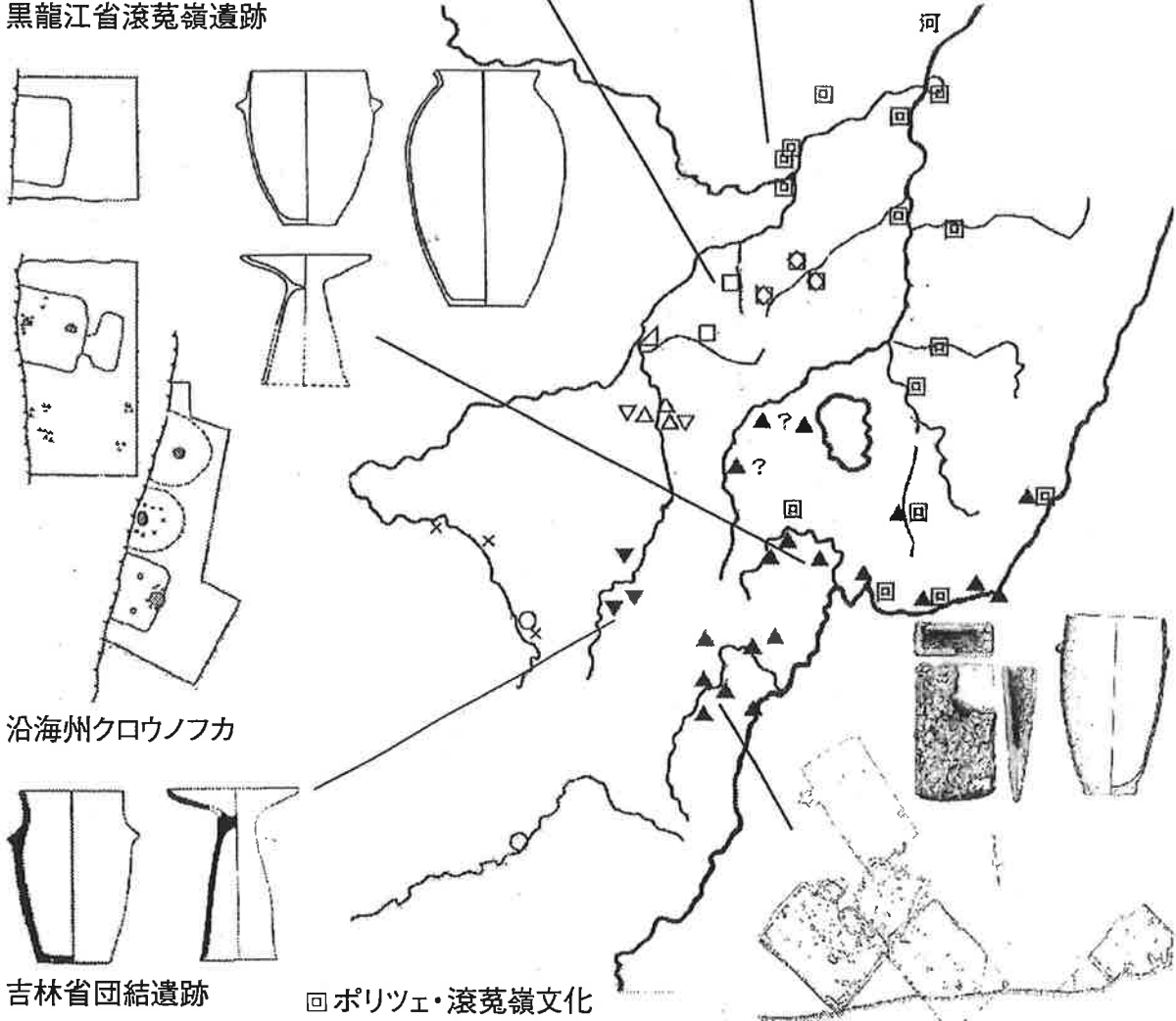
(二) 『世語』にいう。王頌は字を孔碩といい、東萊の人である。晋の永嘉年間の大賊王弥は、王頌の孫である。



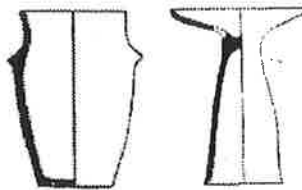
沿海州ポリツェ遺跡



黒龍江省滾菟嶺遺跡



沿海州クロナフカ



吉林省團結遺跡

回 ポリツェ・滾菟嶺文化

▲ クロナフカ・團結文化

咸鏡北道会寧五洞

挹婁(ポリツェ・滾菟嶺文化)・沃沮(クロナフカ・團結文化)

東洋, 2012 『邪馬台國の考古学—魏志東夷伝が語る世界—』角川選書



「魏書東夷伝」の主な記述

| 地域                     | 国数・戸数                  | 首長・官吏等                    | 集落構造・交易関連その他の記述   |
|------------------------|------------------------|---------------------------|---|
| 夫余<br>中国吉林省一帯          | 8万                     | 君主                        | 宮室・倉庫・牢獄あり。櫛ありて棺なし。兵器は弓矢・刀矛。  |
| 高句麗<br>中国遼寧省・吉林省・北朝鮮北部 | 3万                     | 王あり。大君主なし。                | 都、宮室、小城、宗廟、大倉庫なし。牢獄なし大屋をたてて鬼神を祭りまた霊・星・杜稷を祀る。  |
| 東沃沮<br>北朝鮮咸鏡北道一帯       | 5千                     | 大君主無し、長帥                  | 居処は句麗に似る矛を持ちて歩戦。櫛をつくる、死者は仮に埋め皮肉がなくなれば骨をとり櫛の中におく。  |
| 挹婁<br>中国吉林省・ロシア        |                        | 大君主無し、大人                  | 常に穴居す。射をよくす。弓の力は弩のごとし。  |
| 濊<br>朝鮮半島東半部           | 2万                     | 大君長無し、官(侯・邑君・三老)          | 疾病で死亡すれば旧宅を捐棄し新居を作る。  |
| 韓 馬韓<br>朝鮮半島南西部        | 50余国、10余万              | 長帥(臣智・邑借)                 | 城郭無し、草屋・土室、居処は冢のような草屋・土室をつくるが出入口は上にある。棺ありて櫛なし。諸国には別邑ありて大木を立て鈴鼓をかけ鬼神に事かう。州胡…乗船して往来し中韓に市買す。三韓の王である辰王は馬韓の月支国に治す。 |
| 辰韓<br>朝鮮半島南東部          | 24国、4～5万               | 渠帥(臣智・險側…)                | 城柵有り、小別邑、大鳥の羽をもって死を送る。鉄を出す韓?・倭徒にこれを取る。  |
| 弁韓<br>朝鮮半島南部           |                        |                           | 城郭有り、居処は辰韓と同かまどを設けるにみな戸の西にあり。   |
| 倭<br>西日本               | 使訳通じる国 30 国、7ヶ国で20万戸以上 | 倭国…女王、官、一大率、大倭諸国…長官、副官、大人 | 都、宮室・楼観・城柵、邸閣、屋室、国々に市あり、対馬国・一支国…南北に市糴す。兵器には矛・盾・木弓を用いる。  |

七田忠昭, 2005 『吉野ヶ里遺跡—復元された弥生大集落—』 同成社